《序文》

陸奥宗光よ、再び。

会長　渡辺利夫

福澤諭吉は、啓蒙思想家として広く知られるが、他面では国権主義者であり、国権の伸張のためには、権謀術数もこれを用いなければならないと主張するリアリストである。福澤のこのマキャベリズム論は『時事小言』において鮮やかである。国権を伸張するためにはどうしたらいいのかと問うて、こういう。

《内国の政治既に基礎を固くして安寧頼むべきの場合に至れば、眼を海外に転じて国権振起をするの方略なかるべからず。我輩畢生の目的は唯この一点に在るのみ。読者も必我輩と見を同うすることならん。抑も外国の交際は相互に権利を主張するものにして、情をてするにず》

外交とは権謀術数をもって権利を主張するもので、情を以て相接するものではないという。

《情の反対は力なり。外国交際の大本は腕力に在りと決定すべきなり》

福澤のこの考えを体現した人物が陸奥宗光であろう。日清戦争の外交の全局を指導した外務大臣が陸奥宗光である。陸奥の凛たる漢語調の日清戦争回顧録が『新訂蹇蹇録』（岩波文庫）である。危機における指導者の行動をこれほどあからさまに描いた著作を私は他に知らない。

日本が清国に挑んでこれに勝利する術は「機略」以外にはない、そう陸奥は判断する。

戦う以上は勝たねばならない。勝利してなお列強の反撥は避けられない。みずからを「被動者」、清国を「主動者」とし、余儀なく戦わざるをえない戦争だと装うことに陸奥は努めた。陸奥は、清国が呑むとも考えにくい朝鮮内政の共同改革案を提示し、清国がこれを拒否したことをもって開戦の大義とするのだが、福澤のいう権謀術数とはこういうことをいうのであろう。

また、弱者が強者に挑んで勝利するには、敵の機先を制するより他ない。戦局のことごとくで日本軍はこの戦法に徹し、勝利を手にした。そして、日本は日清講和条約において清国に「朝鮮国ノ完全無欠ナル独立自主ノ国タルコト」を確認させることに成功したのである。

米露中の権力政治世界にあって、日本にも新しき陸奥宗光、いでよ。